



# シカゴ 企業戦士たち

第六回

今回は、シカゴランドにおける日系ビジネスの開拓者として知られ、また JCCC副会頭を務めて頂いております Ark Technologies Inc.代表取締役会長 壁下様にご執筆頂きました。

私が商社の初代シカゴ駐在を命ぜられミシガン湖畔のアパートに居を構えたのは 1967年 32才の晩秋だった。当時シカゴでは日本車は 1 台も見られなかったが TV では日本の全二輪車メーカーの宣伝が流れていた。以来連続 38年間をシカゴに住むとは夢にも思わなかった。

## 1) JCCC加入企業の変遷

今年 JCCCは創設 40周年を迎えるが、当初の日系企業は商社、運輸船会社、銀行、証券会社が殆どでメーカーは僅かだった。その後時代の変遷で今や 370社の企業と個人会員で 50以上の加盟による JCCCとなりメーカー企業が圧倒的に多くなったが、当初メーカー駐在員の中西部地区への売り込みは壮絶な戦いであった。米国の心臓部にはあらゆるメーカーがあって外国製の工業用品の買い付けなど見向きもしなかったし日本製品の品質不信が根強かったからだ。その第一線で特に印象的な 2 人のメーカー戦士が居た。1 人は Nichiconの武田一平氏でもう 1 人は OSGの大沢氏で商社を経由せず米国ユーザーへの直販努力をされ激戦の苦勞を語っておられた。この両氏は現在日本本社の最高経営者となっております。

## 2) 商社マンから自営製造業への転換

こうしたメーカーの直販開拓努力を見ていた商社マンの私に転機が訪れたのは 1980年だった。ゼロから商社支店を開設し法人に育て上げた 13年後遂に帰国の内



示をうけたのだ。私は日本人でアメリカが好きだとか住み易いからとかで永住する人には共感を持てず永住など頭に無かった。ところがシカゴで成長した 3 人の子供達が日本語のハンデを理由に帰国を拒み、已む無く、現地退職し 45才で独立自営する決断を下したのだ。製造業の経験は何も無い身ながら大阪の理研発条と京都の材料メーカー、サンコールとの合併で汗を流し手に油する激務への挑戦が始まったのだ。その武器は自家用飛行免許を取って自在に客を開拓する術と CNC 制御のスプリング成形機を購入して無人運転生産の術と多額の銀行及び政府債の融資を受ける術の三つで、米人雇用者の思想を [顧客最優先と品質第一] へと改善教育に命を賭けたのだった。しかし赤字が累積し瀕死の状況の 1984年に株主の一社が撤退し愈々倒産の気配が漂い、我ながら商社マンが未知の製造業に転向したのが無謀だったのかと思い始めた時だった。クライスラー系自動車部品メーカーが当社の品質を最高と評価し大量注文を呉れ、同時にボストンのポロロイドカメラが同じ理由で全量発注を決定してくれたのだ。地獄での仏とはこの事だった、死につつある我が社を生き返らせよう" を妻との合言葉にし、壮烈な戦いを続けたのだ。

## 3) 自家用機で客開拓

この広大な米国での販売活動を制す為にはパイロット免許を取る他無かった。単発小型機で片道 4 時間飛ばすボストン迄何十回も飛んだが行きか帰りに必ず途中の各州のお客を訪問着陸し、冬シカゴへ戻るフライトはいつも夜間飛行だった。途中で落雷、豪雨、吹

雪、氷結に会い緊急着陸し一夜を明かす命懸けのフライトもあった、しかし1日のフライトでこの広大な中西部や東部の遠距離の中を5～6社訪問するウルトラCの効率よい戦術は着々と成果をもたらしてくれた。

#### 4) 日系自動車産業の中西部への進出

創業7年を経てやっと経常利益が確保できた折に日系自動車及び大手部品メーカーの米国生産が始まり当社の自動車用金属部品及び電線部品を売り込むべく新たな挑戦を始めたのは天命とも言えるタイミングだった。しかし、自動車用重要保安部品の現地調達は生易しいものではなかった。日本に本社がなくバックアップ体制も無い当社には納入不備の責任負担能力への疑念が付いて周り本格大量受注には至らず採算の取れぬ小ロットの試作試験品の納入ばかりだった。実績作りと品質確立に明け暮れた数年は忍耐と労力の限界に来ていた。米国企業への取引は増大したが日系企業への困難さに苦しみながらも我社の生産体制と高品質が認められる日が来ると信じて諦めなかった。

#### 5) 悲願の日本車への採用

創業10周年を迎えた頃にやっとToyota, Honda, Nissanの日本車米国生産用の部品として採用が決まり信頼性が認められ、悲願の大量受注に漕ぎ着けた。そして次に取り掛った改善テーマは機械とか材料ではなく雇用10年の米人従業員達に個人技でなくチームワーク態勢を教え込む事であった。基本的に自己主張が強く好き嫌い"を主に働く米人に、お客にとって"良いか悪いか"を基本とし利己的で独善的な対決態度を排除する教育に明け暮れた。その結果が今お客様から当社への信頼感と安心感による取引を戴けるまでになった。思えば長い38年のシカゴでの企業戦士ではあったが今老兵の身になって来たのも又自然である。

#### 6) 世代交代

時は流れ日米間の目覚ましい経済発展は日系の米国生産増加で雇用促進を生み出し、今当社の2工場に400人弱が働き日系自動車関連各社のローカルコンテンツ率向上に貢献している。私の操縦する家用機もより安全な全天候自動操縦装置付きの双発機に進化しているが企業のライフサイクルは30年と言われ明らかな世代交代の時期に差しかかっている。JCCC40年の足跡と日本を離れて米人育成に努力と貢献をされた多くのシカゴ人の歴史を実感するこの頃である。9月に私の自叙伝的著書「空飛ぶ社長のアメリカンドリーム」(東京、青山の新風舎発行)が発売されたが、シカゴ企業戦士の一端を垣間見て戴けるであろう。

